

1.

北東北縄文Walk 【2】

縄文の森に抱かれて 600 を越える土屋根の竪穴式住居群 縄文の村がそっくりそのまま残っていた

ストーンサークルを取り囲む土屋根の竪穴式住居群 御所野縄文遺跡探訪

縄文中期後半

岩手県一戸町

2008. 10. 30.

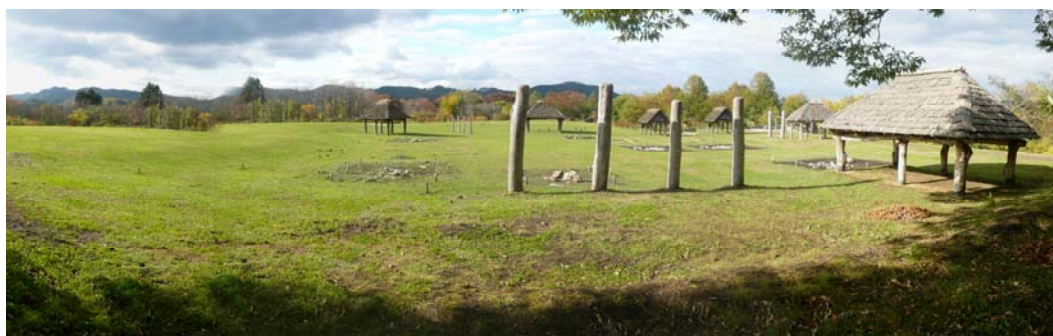


1. 縄文の大集落 御所野遺跡 Walk

- 1.1. 東のむら 土が載る縄文の竪穴住居群
- 1.2. のむら 御所野遺跡のストーンサークル
- 1.3. 漆の復元人工林
- 1.4. 西のむら 土が載っていたことを明らかにした焼失住居
- 1.5. まとめ縄文の大集落 御所野遺跡 Walk

2. 御所野遺跡の概要と御所野遺跡の出土遺物

追加 岩手県滝沢村 湯舟沢ストーンサークルにも立ち寄りました



北東北 縄文の森の中 土屋根が載る竪穴住居群がストーンサークルのある広場を取り囲む御所野縄文遺跡 縄文中期後半

昨年の10月30日 八戸 是川縄文遺跡の見学を済ませた午後 今回どうしても立ち寄りたかった岩手県一戸の御所野遺跡へ向かう。 八戸から在来線旧東北本線に乗って青森・岩手の県境を越えて南へ約 40 分。平行して流れ下る馬淵川を遡った一戸の町 森に囲まれた河岸段丘の上に 600 を越える住居が眠る縄文の大集落 御所野縄文遺跡がありました。

縄文の竪穴住居の屋根に土が載っていたことを始めて明らかにした遺跡で、縄文の森を背景に緑の草に覆われた三角形の土屋根の竪穴住居が並ぶ様子を写真で何度か見た遺跡である。

また この御所野遺跡には三内丸山遺跡の環状列石と同じくストーンサークルのさがけと考えられる配石遺構が環状に集落の中央広場にあり、それを土屋根の住居群が取り囲んで集落が作られ、その周りには 人工物が見られない 自然の森が広がっていると言う。

また、この青森・岩手の県境の森は古くからの漆の産地。一戸の直ぐ隣町が浄法寺漆の浄法寺町。

かつて 金閣寺の再建時にどうしてもうまく行かなかった金箔貼りの材料として使われた漆がこの浄法寺漆だったとの記憶がある。

縄文晩期素晴らしい漆文化を花咲かせた是川遺跡へはこの山間を流れ下る馬淵川を下れば直ぐである。

是川縄文漆のルーツがこの地一帯の漆だったのだろう。一度 漆掻きの現場もみたい。

訪ねた人たちが異口同音に「雄大な山々の自然に包まれて 気持ちのいい素晴らしい縄文集落の体験だった」という御所野遺跡で、 駆け足の御所野遺跡 Walk でしたが、縄文の森をバックの土屋根の縄文の竪穴式住居群にストーンサークル そして 思いがけず、漆掻きの痕跡が付いた漆の復元人工林にも出会え、満足の気持ちの良い縄文の森でした。

1. 縄文の大集落 御所野遺跡 Walk

朝早く是川の里へ出かけることができたので、早昼を済ませて 八戸発 12 時 10 分発の青い森鉄道・いわて銀河鉄道(旧東北本線)に乗り込む。八甲田・八幡平の山塊と北上山地の狭い山間を岩手県の県境を越えて 南から流れ下ってくる馬淵川を遡って、約 40 分ほどで御所野縄文遺跡のある一戸につく。八戸から新幹線で二戸に出て、乗り換えてひとつ先の一戸へ行く手もあるが、運よく在来線に飛び乗れてラッキーでした。



馬淵川を南に盛り上ってゆく 青い森・岩手銀河鉄道 (旧東北本線) の車窓より

一戸の駅のホームにも縄文の土屋根の竪穴式住居群の写真が載った御所野遺跡の案内板が立っている。

地図で見ると駅の直ぐ東側を流れる馬淵川の向こう 南東方向の丘陵地の一角。それほど遠くはないが、歩くとちょっと時間がかかる。駅前でバスの便はどうもなさそうなのでどうしようかときよろきよろ。

タクシーの運転手さんから

「御所野遺跡の入館者への交通補助が町から出ていて、タクシーの領収書見せると 500 円が帰ってくる」

と教えてもらってタクシーへ。 今日には本当にラッキー。歩き始めず良かった。



八戸から馬淵川沿いに青い森・岩手銀河鉄道(旧東北本線)で約 40 分 御所野遺跡のある一戸駅 2008. 10. 30.

御所野遺跡までは車で 10 分ほど。地図で見ると一戸駅前の直ぐ南のところで馬淵川を東に渡って、真っ直ぐ丘陵地へ登っていき、国道 4 号線を越えれば直ぐ御所野遺跡である。

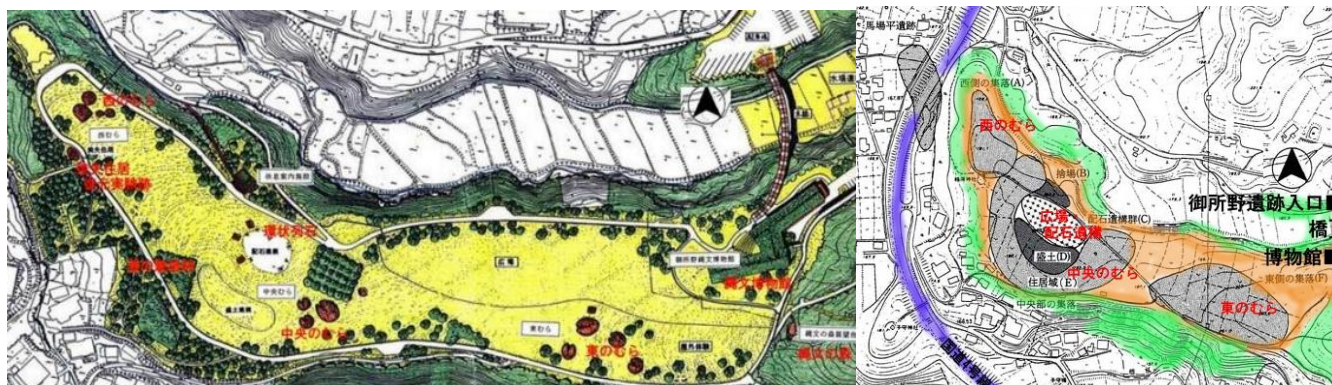
橋を渡るとぱっと正面に川に沿って南北に伸びた丘陵地が見え、御所野遺跡へも視界の開けたところを登ってゆくものと思っていましたが、幾度か道を折れ曲がって、家並みを外れ、森の中を抜けてゆく。ちょっと不安になりかけた頃に森の真っ只中にぽっかり広い駐車場と小さな御所野遺跡の入口の三角形の小屋がある場所で下ろされる。人っ子一人居ない。これは ちょっとイメージが違くと眼を白黒。



御所野遺跡・縄文博物館の入口



一戸駅からタクシーで約 10 分 馬淵川を渡って南東の丘陵地の森を登ると 御所野遺跡・縄文博物館の入口



縄文遺跡公園として整備された 御所野遺跡 全体図

地図を取り出して、位置を確認。

三角屋根の御所野遺跡の入口は屋根のある吊橋で小さな谷を渡った向こうの細長い丘陵地全体が御所野遺跡である。

西側を南北に流れる馬淵川に向かって 緩やかな傾斜で伸びる舌状の細長い丘陵地全体が御所野遺跡。御所野遺跡への道はこの舌状の丘陵地に浅い谷を挟んで並行する北側の丘陵地を登って一番上側東の端から谷を渡って遺跡の中へ入ることになっている。これで了解。

橋も落ち着いた色の屋根のついた木製の立派な吊橋。 本当によく練られた計画的な遺跡公園である。

橋を渡るとそのまま御所野縄文博物館のエントランス。

素晴らしい建物で、御所野遺跡を中心にこの地域の縄文遺跡の紹介と遺物展示がなされている。

縄文博物館の学芸員の方に色々教えてもらって 博物館の展示を後回しにして 先に 遺跡公園に出る。

今日はなんといっても、土屋根の竪穴式住居を見たいと。

外にでると、周囲を山と森に取り囲まれ、人工物が見えない細長い広大な草地在東から西に緩やかな傾斜で広がっているのが

見える。 今まで予想もしていなかった広い台地にビックリしました。



馬淵川に突き出て東西に伸びる舌状丘陵地の一番上 御所野遺跡の東端に 縄文博物館がある 2008. 10. 30.



縄文博物館前のスロープから西側に広がる御所野遺跡 東のむら 2008. 10. 30.

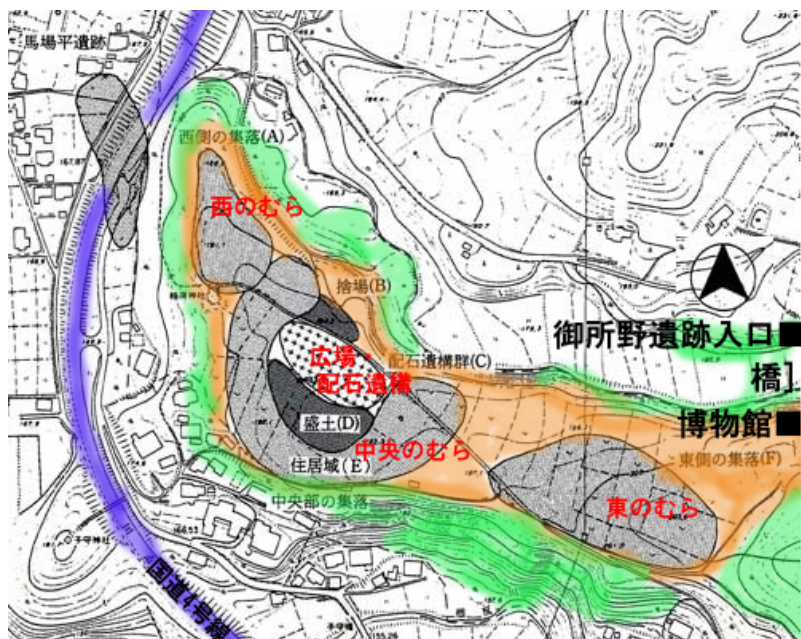
人工物の全く見えない北東北 秋の自然・縄文の森が前面に広がっていました

東から西へ真っ直ぐにスロープが伸びる台地の全体に 600 を越える竪穴式住居群が密集して集落をつくっていたという。縄文中期後半の集落がそっくりそのまま眠る御所野遺跡。ぐるとみわたすかぎり、東北の山々を背景に紅葉した紅葉が広がる素晴らしい景色。今は広い草地の公園に整備され、600 を越す竪穴住居跡が出土したとは想像がつかない。

人っ子一人居ない縄文の森が眼前に広がり、本当にゆったりとした気分になる。

御所野遺跡の東の端 東のむらが広がっていた斜面のところで、広い草地の左手の林の前に緑の三角形をした竪穴住居が見える。また、振り返ると斜面の一番上に縄文博物館の建物。この屋根の上にも土が載っていて、草が生え、縄文の森の雰囲気壊さぬよう配慮がされている。

まず、写真で何度も見たこの土屋根が載った復元竪穴住居を探す。なだらかな斜面の向こうのほうに小さく緑の三角屋根の住居群が見える。わくわくしながら 東のむらへのスロープを復元竪穴住居群に向かって降りてゆく。



御所野遺跡 集落遺構 配置図

遺構図によるとこのなだらかなスロープの草地全面に住居跡が広がっていたようであるが、今は整備された草地。ここに昔の通り土屋根の住居群を建てて、縄文の村をそっくり復元するのは無理なのだろうか・・・。
多くの縄文遺跡でひとつぐらいそんな遺跡があれば・・・と思うのはざいいたくなのでしょうか・・・。

1. 1. 御所野遺跡 東のむら



丘陵地の東の端 縄文博物館横からスロープを下ると土屋根の復元住居が建つ東のむら跡 2008. 10. 30.

細長くスロープを描いて西に伸びる丘陵地の左手 こんもりとした林の前に「西のむら」の土屋根の竪穴住居群が復元されている。何度も写真で見たことがあるが、土屋根が周りの自然に溶け込んで実に美しい。

是非とも出会いたかったこの光景。土屋根に草が生え、緑の三角の柔らかなスロープが実に良い。

今まで見てきた縄文遺跡 竪穴住居群とは本当に印象が違う。これが縄文のむらの姿だと聞く。

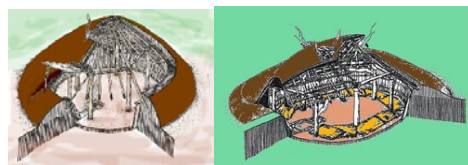


土屋根が載る御所野遺跡の竪穴住居群 2008. 10. 30.

御所野遺跡 西のむらの端から出土した焼失住居から屋根に土が乗っていたことが明らかになった



御所野遺跡 竪穴式住居の内部



竪穴式住居の骨格図(一般)

やわらかい緑の住宅群がこちらに口をあけて建ち並ぶ。振り返る広い草地全体にも 同じ緑の住宅群が建ち並んでいた。「これが縄文の集落なんだ」と頭にしっかりインプット。

復元住宅というと復元された当座はよく手入れされているが、その後放置されて荒れてしまうのが常。 でも、本当によく手入れされ、緑の縄文の村のイメージを高めてくれているのがある。このやわらかい緑の屋根のスロープは何度見ても飽きない。

復元された竪穴式住居の入口から中に入ると、 雪が深いための寒さ対策であろう 意外と竪穴が深い。

以前北海道南茅部大船縄文遺跡の竪穴式住居ほどではないが、深く入口には段梯子が取り付けられ、竪穴の周囲の土手には土留めの役割もあるのだろう杭が土手の高さで張り巡らされていた。

竪穴の中央に炉が組み、4本の柱で竪穴住居の骨格が作られている。

(御所野遺跡では大型の竪穴住居では6本柱のものもあるという)

意外と広い住居の内部。しばらく 真っ暗な家の中に座り込んで、静かな空間を楽しむ。

【竪穴式住居】

住まいの原型といえる竪穴式住居はその地方の気候・環境に対応して快適に暮らせる様に数々の工夫がなされている。

住居の形を決める穴の形は円形・楕円形・四角と色々であるが、一般には地面に丸く浅い穴を掘り、周辺にその土を積み上げ、雨水の進入を防ぐ土手にする。次に、竪穴の中央付近に四本の柱を立て、その上にはりを組み、中心のはりに向けてぐりと丸太を架け、骨組みをつくり、その上に萱(かや)やワラなどの草を厚くふいて出来上がり。 室内の中央には炉がすえつけられる。

厚く草をふいた屋根は、夏の強い日差しと冬の寒さを防ぎ、一段掘り下げた床は、地温によって、冬は暖かく、夏は涼しく保たれる。地中深くの温度は、夏も冬も一定で、竪穴住居は、寒い地域ほど掘り下げが深く、北海道南茅部の大船遺跡の竪穴住居では深さ2.4mほど身の丈を越える。 この雪深い御所野遺跡でも 穴の深さは深い。



東のむらから西へスロープを降りた平坦地がこの丘陵地の中央 そこに中央のむらが見える

1.2. 中央のむら 御所野遺跡のストーンサークル



中央のむら 北東側より南西方面を見る 中央広場・ストーンサークル 左端に中央の村住居群にみえる

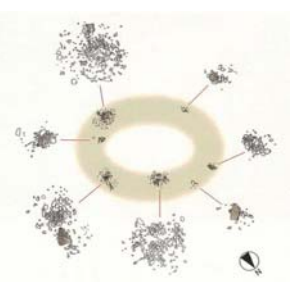


御所野遺跡 北西側より 南東方面 中央のむらを望む 右端に中央のむら 住居群



御所野遺跡 中央のむら 中央広場・復元住居群

配石遺構のすぐ外に掘立柱建物が建ち、右端 北側に中央のむら住居群が復元されている
このストーンサークルのある中央広場の外側をU字状に住居群が取り囲み 集落が構成されている。



個々の配石が環状に作られて ストーンサークルを構成
三内丸山遺跡の配石遺構とともに ストーンサークルの原型か?

丘陵地を東端から西への緩やかなロープ上に広がる東のむらからこのスロープを西へ下るとこの舌状丘陵地の中央平坦地で、この平坦地に御所野遺跡の中心 中央のむらがあり、ここから丘陵地は西北へ折れ曲がり、なだらかなスロープで西端の西のむらへと続いている。

東のむらとの境となっている雑木林を抜けると、草地の中央に掘立建物に取り囲まれた中央広場のストーンサークルがぱっと広がる。

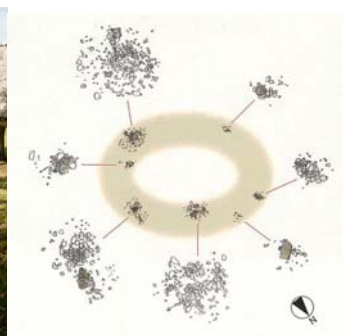
この御所野遺跡から東側を南北に走る八甲田・八幡平の山々の向こうにある鹿角 大湯のストーンサークルがある丘陵地に本当によく似通った地形で、周囲には素晴らしい自然の野山が広がっている。

資料によると 180 メートル×80 メートルの範囲に小配石遺構が連なって、環状に大きな配石遺構を構成。配石遺構の下からは底部に穴のあいた深鉢土器や墓が確認された。

また、この中央広場からの出土遺物は、縄文時代中期末の土器、石器のほか耳飾・ミニチュア土器、奈良時代の土師器の壺や甕、鉄斧や腕輪なども出ている。

今まで 見たストーンサークルとはちょっと異質で 草地が広がる中央広場に 草地を四角に削り取ったところに配石遺構が7ヶ箇所広場の中心を環状に取り囲んでいる。直ぐ傍らにはこのトンサークルを取り囲んでここでの祭りと関係した掘立建物が立っている。 個々の配石遺構が、環状に配石がつながってはいないので、直ぐそばで見るとストーンサークルとのイメージはちょっと薄いのですが、でも 秋の紅葉した大自然の本当に中心部にこの広場・ストーンサークル。この先祖たちの墓を中心に縄文の集落が取り囲んで、周囲の自然に溶け込んだこの配石遺構群を見ていると直ぐに縄文のストーンサークルのイメージが広がってくる。

やはり 素晴らしい野山に包まれた森に 心優しき縄文人は 祖先たちと一緒に暮らしていたと。



御所野遺跡のストーンサークル 配石遺構

大きいものでも直径 2m ほど それらが環状に配され、さらに配石遺構が環状になっている

ストーンサークルが広く作られるのは縄文後期 三内丸山遺跡やこの御所野遺跡は縄文中期の遺跡でストーンサークルの萌芽期である。したがって この御所野遺跡のストーンサークルも次の時代に発展したストーンサークルの原型と考えられる。

(参考) 御所野遺跡の配石遺構

御所野遺跡

縄文最古の配石遺構、竪穴住居跡、 岩手県二戸郡一戸町岩館・御所野

御所野遺跡は、国道4号一戸バイパスに近接する馬淵川東岸の、標高約200メートルの河岸段丘上に位置しています。

平成元年(1989)一戸町の農工団地造成のために調査され、縄文時代中期末の配石遺構と竪穴住居跡などが発見されました。面積は54,675平方メートルです。東西約500メートル、南北約120メートルの範囲に、中央部、東、西の三つの村があります。中央部は、中心の広場と配石遺構、墓坑の外側に大きな据立柱の建物が回り、U字型に住居跡が囲んでいます。

配石遺構群は、段丘の低い所に北西方向へ広がりをみせ、180メートル×80メートルの範囲で発見されました。小配石遺構が連なって、大きな配石遺構をつくっています。さらに底部に穴のあいた深鉢土器が発見され、下部に墓が確認されています。

出土遺物は、縄文時代中期末の土器、石器のほか耳飾・ミニチュア土器、奈良時代の土師器の壺や甕、鉄斧や腕輪などが出土しています。



御所野遺跡の配石遺構

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~mt2000/kitatouhoku-iseki13.htm#goshono>より



据立柱建物に囲まれて配石遺構がある。
配石下に土壇も見つけられている。



手前の配石の立石は石皿
食物を扱った人の霊への感謝と祈りが想像される



簡素な平石の配石



二つの配石墓か、一つの大きな墓か？



据立柱建物は配石のすぐ隣にある



大きな石で配石している



中央に平石 周囲に細長い石



大きな石(立石?)を含めての
小円を模っているのか

ついでながら、御所野遺跡の配石遺構それぞれは、草地の配石遺構部分を四角に区切って柵が設けられ保存されているが、ちょっとイメージに合わない。縄文のランドマークは環状・渦巻き紋 その代表的なストーンサークルが、四角区切られているのには せつかく 膨らんできた縄文の円環のイメージがしぼんでしまう。

囲むなら 是非 楕円状に囲って欲しいものである。

2.3. 漆の復元人工林

縄文博物館では川遺跡を見てきたことや 一戸の隣町「漆」の名産地 浄法寺の漆を見に行きたいと話すと、ここでも漆掻きを実践しているので、漆の人工林に行けば、漆の木に幾筋もつけられた漆掻きの跡がみられると教えてもらった。

この一体は昔から続く漆の名産地 縄文晩期には是川遺跡を始め、この馬淵川流域周辺の縄文遺跡からは縄文漆の素晴らしい遺物が出土している。 縄文中期には三内丸山遺跡で人工的に栗林が維持され、栽培農業が始まっていたが、この地方では漆の栽培がすでに広く行われていた可能性がある。そんなイメージを意図した漆の人工林の復元との事。



御所野遺跡の漆の復元 人工林

御所野遺跡のある一戸・浄法寺周辺の森は今に続く古くからの漆の産地

この周辺から多数出土する縄文漆の遺物がそのルーツだろう???

御所野遺跡中央のむらと西の村の間の草地の南側の端に漆の木が栽培されていました。

漆掻きの絵は何度も見たことがありますが、実際に漆の木に幾筋もつけられた漆掻きの跡を見るのは初めて。

この「漆」のルーツをたどればこの地方で大きく花開いた「縄文の漆」文化の系譜にちがいない。

「漆の名産地 浄法寺町へ行って 漆掻きの林を訪ねたい」 と思っていましたが、思いもかけず、御所野遺跡の中でこの漆の林を見ることができました。 これも 本当にラッキーでした。



縄文の漆 御所野の森に復元された漆採取の林 2008. 10. 30.



縄文の漆



縄文の漆 御所野の森に復元された漆採取の林 2008. 10. 30.



1.4. 西のむら 縄文の竪穴住居に土が載っていたことを明らかにした焼失住居跡



中央のむらから西側の丘陵地の縁に沿って 南から北へ 北の端が西のむら 2008. 10. 30.

中央のむら・ストーンサークルのところから さらに北西へ少し下って草地から林へ入るとこの舌状丘陵地の先端部で西のむらがあったところである。

ここからは 縄文時代の竪穴式住居が土屋根であったことを明らかにした竪穴式住居の焼失住居が出土したところである。

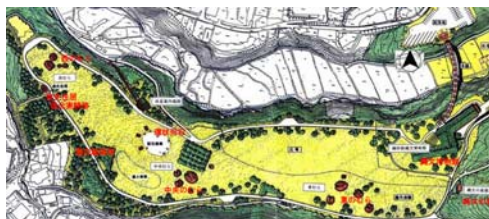
先端部の一番奥に竪穴住居群が復元されている。また、先端部に近い丘陵地の西端に土屋根の復元住居を再度火をかけ、焼失遺構との関係を調査した実験遺構がそのまま残されていた。

この焼失実験がおこなわれていたすぐ横の崖で発掘調査が行われていて、現在もこの御所野遺跡の発掘調査が続いていました。

資料によると平成 8 年 この西のむら周辺から縄文中期末(約 4000 年前)の上屋構造を復元ができる良好な火災住居が 4 棟出土し、この遺構の詳細な検討から、全国で初めての土屋根の竪穴式住居であることが明らかとなった。発見された住居跡は炭化材が竪穴住居の輪郭に沿って散在し、それらの炭化材と炭化材の間には焼けた土の層が重なっていた。この焼失住居の炭化材の層を部材ごとに分け、丹念に観察検討し、それまでの常識だった屋根の構造を覆して、この御所野遺跡の縄文時代の竪穴式住居が土屋根構造であることを明らかにした。

そして これらの調査結果を元に土屋根の御所野遺跡の竪穴式住居群が復元されている。

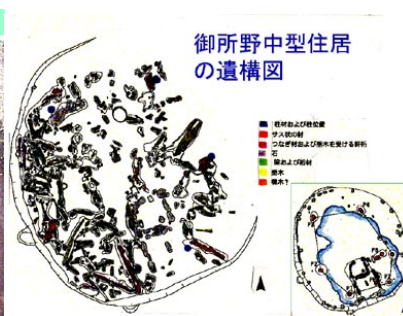
また、復元した土屋根住居に再度火をかけ、焼失状況の確認実験も行われた。



縄文博物館に復元された焼失住宅遺構



西のむらから出土した中型竪穴住居の焼失状況



<http://asalab.blog11.fc2.com/blog-entry-772.html> より



大型竪穴住居 (DF22 住)



焼失大型竪穴式住居 DF22 の焼失遺構とその復元 資料「御所野縄文公園」ヨリ



焼失中型竪穴式住居 DF24 の焼失遺構とその復元 資料「御所野縄文公園」ヨリ



焼失実験竪穴式住居
平成11年9月5日に焼失実験した土屋根住居をそのまま保存しています。この住居は西むらで発見された中型住居を実験的に復元したもので、その2年後に焼いています。



復元 土屋根竪穴式住居の焼失実験跡 2008. 10. 30.



御所野遺跡 2008 年発掘調査現場 御所野遺跡西端部 中世のものとみられる墳墓が出土いずれも 2008.10.30.
角が丸みを帯びた「隅丸方形」で、直径10メートル前後。400—500年前に造られたとみられ、
少なくとも3体の人骨も発見されたという。

内容は岩手日報 2008.11.15. http://www.iwate-np.co.jp/cgi-bin/topnews.cgi?20081115_11 に記載された記事より

1.5. 縄文の大集落 御所野遺跡 Walk まとめ



三内丸山遺跡と並ぶ縄文中期の大集落 御所野遺跡。

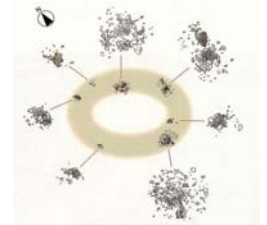
日本人の心を映すといわれる広場に墓域・ストーンサークルのある広場を取り囲む縄文の環状の大集落の村がそっくりそのまま姿を現した。しかも 600 を越える竪穴住居群は今までの常識を覆す屋根に土が載っていた。

写真で何度も見て あこがれていましたが、実際に復元されたその簡素な 3 角形の姿は本当に美しい。

縄文の森 自然の中に溶け込んで建つ姿はふっと出雲大社の神殿のルーツを思わせる静かで落ち着いた美しさ

「まぎれもなく土屋根の住居が建ち並ぶこの姿が縄文の集落だ」と確信した一瞬でした。

三内丸山遺跡のストーンサークルが墓の道に直径 2m 足らずの日時計状配石遺構が点々と並ぶのに対し、この御所野遺跡では雄大な自然の真っ只中 森に囲まれた広い台地の中央に 2m 足らずの日時計状配石など 7 つの配石遺構が 60m 内外の環状にならび、その外側に祭りに使われた掘立柱建物が並ぶ。



この小さな配石遺構が次の縄文後期には大きな環状列石・ストーンサークルに発展して行った。やっぱり、祖先を同じくする集団が共同で祖先を祭り、常に一緒に生活することで再生・共同生活の絆を強めて行った象徴なのだろうか・・・。

雄大な山野の大自然の中 心地よい落ち着いた気分が広がってゆく。

自分の中にあるこのサークルの記憶が姿を現してくるのかもしれない。



憧れの土屋根の竪穴住居群に出会い 雄大な自然の中に溶け込んだ縄文集落の姿に満足一杯の御所野遺跡探訪でした。

そのうえ 一度見たかった漆の木に残る漆掻きの実物が見られたのもラッキーでした。

縄文博物館の裏手でみた数々のボランティア活動・学習の施設とその痕跡が、隅々にまでよく整理維持されている御所野遺跡に現れていると。一戸町と一体となって活動するボランティアの活発な活動が垣間見えたのもラッキー。

縄文館で帰りのタクシー呼んでもらうと帰りも 500 円コインの補助。240 円で一戸駅に帰れ、待ち時間なしで盛岡行の岩手銀河鉄道に乗れ、満足一杯の約 2 時間の御所野遺跡探訪でした。

三内丸山遺跡と並ぶ縄文中期の大集落御所野遺跡は今 三内丸山遺跡や「縄文漆」の是川遺跡 そして ストーンサークルの大湯環状列石・青森小牧野遺跡・秋田伊勢堂岱遺跡や北海道の大船遺跡・鷲の木ストーンサークルなどと共に「北東北の縄文遺跡」として世界遺産の国内暫定リストに登録された。

世界 3 大文明にも匹敵する 森の文化・日本人の心のルーツ 縄文文化が是非とも世界遺産に登録されることを願う。

2008. 10. 30.

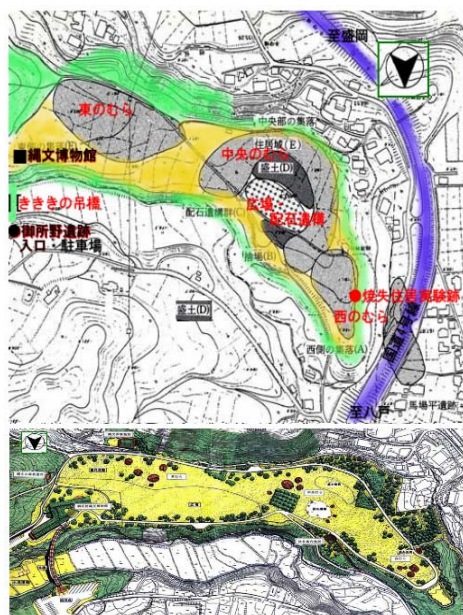
だんだん日が西に傾きだした午後 3 時

満足感一杯で銀河鉄道の車窓を眺めながら

Mutsu Nakanishi

2. 御所野遺跡の概要と御所野遺跡の出土遺物

(御所野遺跡 縄文博物館 資料などより)



縄文中期後半(4000 年前)の縄文の村がそっくりそのまま出てきた 御所野遺跡 岩手県一戸町



土屋根が載る御所野遺跡の竪穴住居群 2008.10.30.

御所野遺跡 西のむらの端から出土した焼失住居から屋根に土が乗っていたことが明らかになった



北東北 縄文の森の中 土屋根が載る竪穴住居群がストーンサークルのある広場を取り囲む御所野縄文遺跡 縄文中期後半

御所野遺跡は馬淵川が両側に起伏の激しい山並みが連なる狭い山間地を北に流れ下る岩手県北部にあり、この川の東岸に張り出した標高約 200 メートル、東西 500m、南北 120mの細長い舌状の河岸段丘上に位置する縄文時代中期後半 (4,000~4,500 年前) の大規模な集落遺跡。

65,000 m²の台地のほぼ全面に中央部・東・西の三つの村があり、中央部は中心の広場と配石遺構、墓坑の外側に大きな掘立柱の建物が巡り、C字型に住居跡が囲む。



縄文の村を形成する 600 棟以上の竪穴住居跡がそっくりそのままみつき、また、竪穴住居の屋根には土が載っていたことも明らかにするなど縄文の村の様子や社会構造を明らかにする貴重な遺跡で国の史跡に指定されている。

また、段丘の中央部の一番低い平坦部には中央のむらの中心広場があり、180 メートル×80 メートルの範囲にわたって小配石遺構が連なって、大きな環状の配石遺構(ストーンサークル)をつくっている。ここからは底部に穴のあいた深鉢土器が発見され、下部に墓が確認され、墓域であったと考えられる。また、その周りを掘立柱建物が取り囲むとともに その傍らにモノ送りが行われたらしき盛土があり、このストーンサークルを中心に祭祀が行われた遺構と考えられている。

縄文中期後半の大集落 御所野遺跡の概要をまとめると次の通り。

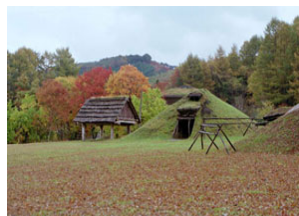
1. 配石(ストーンサークル)と盛土遺構があり、簿域である中央の広場を中心に東・中央・西と3つの集落が計画的に配置された典型的なむらでその住居は 600 棟を越える縄文時代でも最大級の集落遺跡
遺跡の周辺には現代的な建造物が全くなく、縄文時代の集落跡がほぼ完全に残っている稀な遺跡
2. 発掘調査で西の村から多数の焼失住居が見つかり、この調査から縄文時代に土屋根の竪穴住居があったことが初めてわかった遺跡
3. 配石遺構(ストーンサークル)は、中央部の段丘の低い所、180 メートル×80 メートルの範囲で発見。
小配石遺構が連なって、大きな配石遺構をつくっている。
さらに底部に穴のあいた深鉢土器が発見され、下部に墓が確認されている。
4. 御所野遺跡のムラは、墓域を中心に営まれ、様々な祭祀が行われたと考えられている。
その核となるのが前述のストーンサークルです。ストーンサークルを取り囲むように掘立柱建物がいくつも建てられ、その隣では、モノ送りの儀式が行なわれたらしき盛土遺構が広範囲にみられます。
5. また、この御所野のムラでは、竪穴住居の中でも祭祀が行われていた。
西のムラの中心的な建物では、奥の方に「石棒」という縄文時代の祭祀の道具が立てられ、その周辺からトクリ形土器や彩色土器、あるいはミニチュア土器など、実用的ではない土器が 8 点、完全な形でまわって出土。竪穴住居の奥の間に祭壇で、近くに石棒が祀られ、小型の土器類が神にささげられた可能性が極めて高い。
入口中央にあった炉も、神聖な場所であったと考えられます。



配石遺構のひとつ



焼失竪穴住居跡の一例



土屋根を復元した竪穴住居



竪穴住居の中から出土した
トクリ型土器(住居内での祭)



北東北 縄文の森の中 土屋根が載る竪穴住居群がストーンサークルのある広場を取り囲む御所野縄文遺跡 縄文中期後半

御所野遺跡の出土遺物 概要 インターネット検索より



<http://www.town.ichinohe.iwate.jp/goshono/mura/syutudohin/syutudohin.htm> より



1 大木式土器(南の土器)

縄文時代中期の土器で渦巻きの文様などが特徴です。宮城・福島など一戸より南にこの土器の文化圏の中心があります。御所野遺跡からは大木式土器のほか青森・北海道西部などでよく出土する円筒上層式土器も出土しています。



2 円筒上層式土器(北の土器)

縄文時代中期の土器で口に突起4ヶあり円筒形をしています。北海道西部・青森など一戸より北にこの土器の文化圏の中心があります。御所野遺跡からは円筒上層式土器のほか宮城・福島などでよく出土する大木式土器も出土しています。



3 人形紋土器片

人の文様のつけられた土器片。頭に羽を付けているシャーマンと考えられています。



4 深鉢形土器(精製土器)

非常に丁寧に作られている土器で、祭事のときなどに使われたものと思われます。粗雑に作られた粗製土器に対し、精製土器と呼ばれています。



5 深鉢形土器(精製土器)

口の部分がヒビ割れたためヒビの両脇に穴を開けて補修した後が残っています。縄文人は物を非常に大切にしていました。



6 深鉢形土器

キャリバー形とよばれる煮炊きのときに使われた土器で、煮こぼれないよう口の部分が内側に曲がっています。何回も火を受けて下半部は赤色になり、上半部は煤が付着して黒くなっています。



7 深鉢形土器(精製土器)

煮炊きをする土器で、何回も火を受けているため下半分は真っ赤になり、上半分は煤が付いて黒くなっています。煮炊きする土器はこのように背の高いものが圧倒的に多いのは、恐らく浅いものより効率的に火をかけるためと考えられています。



8 浅鉢形土器

煮炊きなどに使われた痕跡はなく、木の葉など様々なものを入れておいた土器と考えられます。



9 ミニチュア土器

高は5cm以下小さな土器で、祭事の時に使われたもので縄文酒が入っていたのかもしれない。



10 トックリ型土器

特殊な形をした土器です。祭事の時に使われたもので、縄文酒が入っていたのかもしれない。



11 土偶

土製の人形です。女性のものが圧倒的に多く、破片資料が多いため、ケガをしたときに土偶を壊し、痛みを取り除くまじないの道具、安産の女神...などの説があります。



12 耳飾り

縄文人のピアスです。大きいものは5cmを超えるものもあります。



13 斧状土製品

装飾品と考えられており、上部にはヒモを通す穴が開いています。



14 三角形土製品

何なのか不明です。人の顔に見えるものもあります。



15 キノコ形・クルミ形土製品

キノコ形やクルミなどの山の幸を形どったものです。



16 石鏃

矢の先に装着した石、多くは硬質頁岩が使われており矢に着けたときの擦着削(アスファルト)が残っているものもあります。



17 石槍

木製の柄の先に取りつけて槍として使用しました。主に大型の動物の狩猟に用いました。



18 磨製石斧

石を磨いて作った斧です。今の斧と同様に木製の柄が付いていました。



19 石匙

携帯用のナイフです。つまみのところをヒモで結び、腰に下げて狩猟にでかけていました。



20 石錘
動物の皮などの穴を開ける道具で、多くは硬質頁岩という硬い石が使われています。



21 石製品装飾品
石で作られたアクセサリーで様々な形に加工されたヒモを通す穴が空いています。



22 石棒
棒状の石製品で、子宝の神様と考えられます。



23 ヒスイ製の玉
新潟県の糸魚川流域のヒスイ製のネックレスです。縄文人は緑色を好んでいたようです。



24 叩き石
木の葉などを叩き割ったり、すり潰すときに使った石です。



26 炭化したクリの実
クリの木は建築材として用い、実も食用として利用しており、縄文人が重宝した木でした。現在の御所野遺跡にも多くのクリの木が見られます。



27 炭化したトナリの実
トナリはそのままではシブがあり、食べることができません。アクを入れて湯がき、シブを取りまします。



28 炭化したクルミの実
クルミは現在の御所野遺跡にも生えており、固い殻を砕いて中味を食用とします。



29 シカの骨
シカの骨は盛土遺構から多量に焼けて砕かれた状態で発見されています。主に弓矢や落し穴で狩りをしたものと推測されます。



30 イナジシの骨
イナジシの骨もシカと同様、盛土遺構から多量に発見されています。イナジシの土器は全国から発見されており、その生命力から特別な動物として見られていたのかもしれない。



31 クジラの骨
内陸に位置する御所野遺跡でもクジラの骨が出土します。このことから海辺のむらとの交流があったことが伺えます。

なお、岩手・青森県境を北上山地北端から八戸湾へそぐ馬淵川流域は縄文時代の遺跡を多く残す地帯で、御所野遺跡を含め、特に中期後半から晩期にかけての特出した遺跡が多く、盛土遺構、環状列石、などの際だった文化様式を示すものや亀ヶ岡文化の優品、貴重な資料が数多く出土している。これらの遺跡の出土品についても、御所野遺跡縄文博物館に展示紹介されている。





盛

銀

午

陽

湯

盛

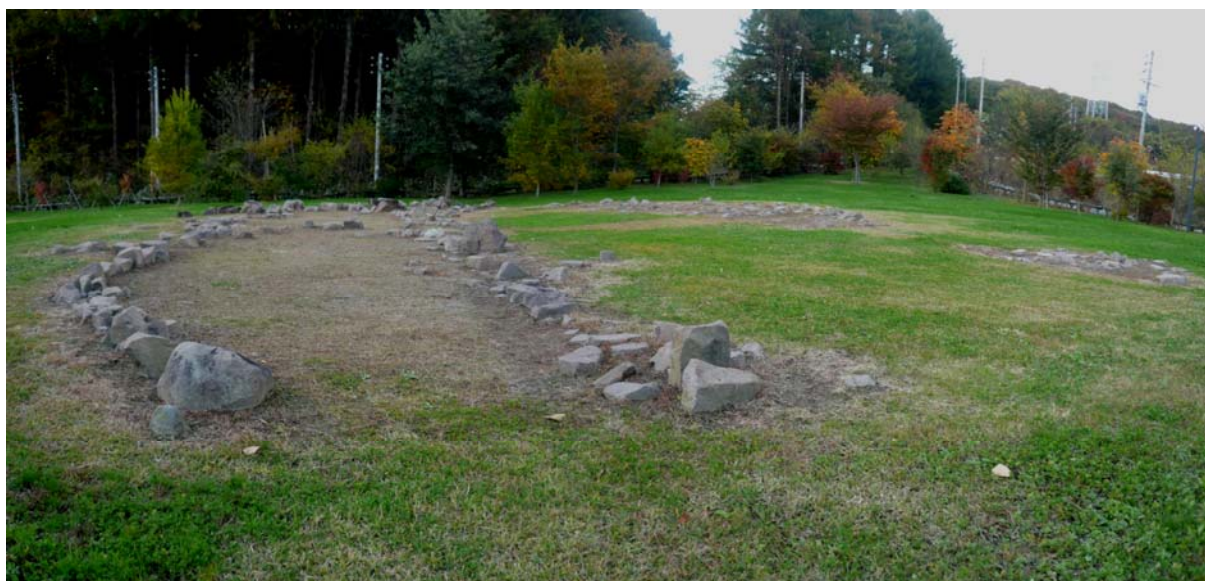
午

1

止

H

山石



盛岡の郊外 雪を抱いた岩手山が美しい滝沢村 湯舟沢ストーンサークル 2008.10.30. 夕

●環状列石保存と整備の経過

平成2年5月28日、湯舟沢Ⅱ遺跡からストーンサークル(環状列石)が発見されました。団地造成工事の事前発掘調査によるもので、村は先人の貴重な遺産として同年7月31日に遺跡の現地現状保存を決定しました。素早い保存の決定は、日本の遺跡保存史上、異例なほどの短期間でした。

その後、用地の公有化と整備を進め、史跡公園「湯舟沢環状列石」として平成10年8月15日から公開しています。また、平成12年4月1日には、隣接地に埋蔵文化財センター「縄文ふれあい館」が開館し、土器や石器に触れて学べる展示室の見学や各種の体験講座が受講できるようになっています。

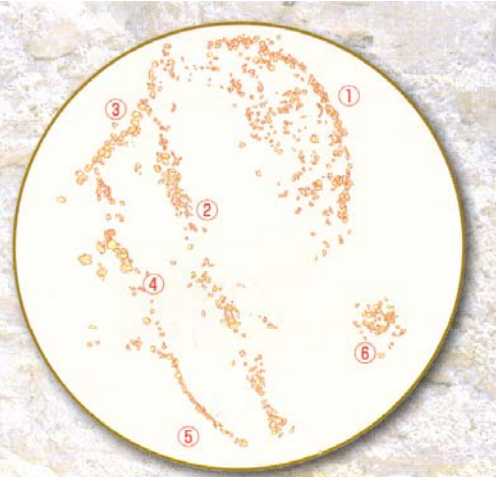
●湯舟沢環状列石(平成8年3月27日村指定史跡)

ストーンサークルは、今から約4千年前(縄文時代後期)に作られました。①弧状に配置された列石の内側に、様々な組石をもつもの、②北西から南東方向への直線上に様々な組石をもつもの、③北東から南西方向へと列状に石がならぶもの、④北西から南東への直線上に組石がならぶ②の西隣りに平行して組石がならぶもの、⑤北西から南東方向へ弧状にカーブを描く列石、などからなり、規模は東西径15m、南北径20mの全体に楕円形をしています。

また、①の南には円形状に石が密集(⑥)しており墓道へと繋がっています。石の下には大小の穴が多数掘り込まれ、穴の土壌を理化学的に分析した結果から縄文人の共同墓地と考えられています。西方には三角錐型の「谷地山」が望まれることから、場所の選定には天体の運行も関係しているとの説もあります。

●史跡公園

史跡公園は、823個の安山岩で実物大にストーンサークルが復元されています。実物は保護のために発見された地中に大切に保存されています(地下1mから3mの深さ)。公園の周囲にはエゴノキ、ガマズミ、ニシギキなど、高木から低木が23種類、900本植栽されており、西方に見える稜線の美しい「谷地山」に沈む夕日を眺めながらの散策が人気となっています。科学技術の進歩による新たな解明も期待されています。



なお、列車の滝沢駅は無人の田舎駅 帰りに盛岡まで行き着いて宿が探せるか心配していましたが、滝沢村はもう盛岡市の市街地の北の端 湯舟沢ストーンサークルのすぐ横まで、盛岡郊外の団地「あずみの団地」が広がり、盛岡の中心まで市街地へのバスがひっきりなしに出ていました。



一戸から南へ 北上川流域にはいると岩手山が見え、盛岡は近い

